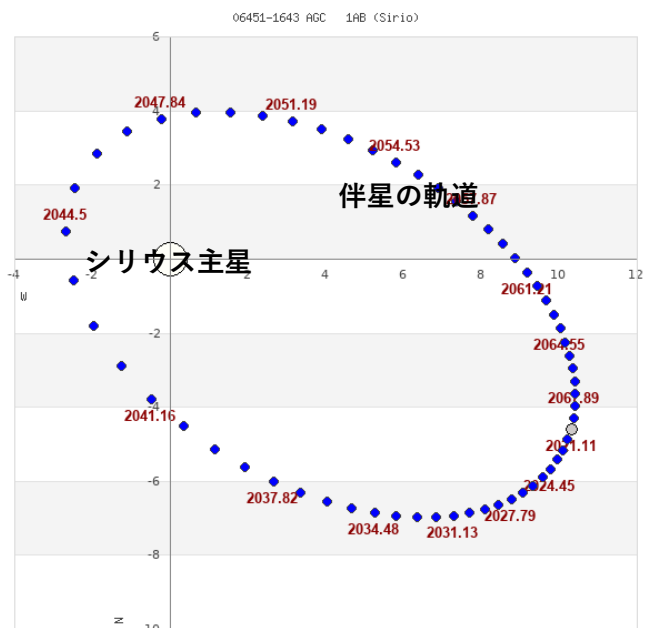




シリウスは話題がいっぱい

全天一の輝星シリウスについての話題は、プラネタリウムでもいろいろお話ししますが、目に見えない伴星があるところまではなかなか辿りつきません。ところが最近、伴星が見やすい位置にあるのでプラネタリウムや公開天文台関係者の間で話題になることが多くなっています。

シリウスに伴星（英語ではCompanion）があることは、1844年にドイツのベッセルという天文学者（数学者としても有名）によって予言されました。彼は、シリウスとプロキオン（こいぬ座 α 星）の固有運動を調べるうち、これらの星が



Washington Double Star Data Base より

ふらついていることを発見しました。これは、まだ見つからない星が近くにあるとその引力で動いているというわけです。果せるかなベッセルの死から16年を経た1862年、伴星がアメリカの望遠鏡製作者クラークによって発見されました。クラークは新しく作った口径46cmの屈折望遠鏡のテストに偶然シリウスを選んだのです。すぐにヨーロッパ各地の天文台で追観測が行われ、8.5等級の伴星がおおよそ50年の周期で主星を回っていることが確かめられました。

主星(A)と伴星(B)の明るさの比は約10000倍です。8.5等級の星はギャラクシティの望遠鏡（口径8cm）でも十分見える明るさですが、主星が明るすぎて見分けるのが大変なのです。今の時期は主星と伴星のみかけの距離は角度で11秒（木星のみかけの大きさの1/4）ほど離れています（図参照）から、条件が良ければ肉眼で見えるチャンスがあります。

この伴星は、後に小さいけれどとても重い星（密度は角砂糖ほどで300kgもある）であることが分かり白色矮星と名づけられました。

（解説員：田部 一志）